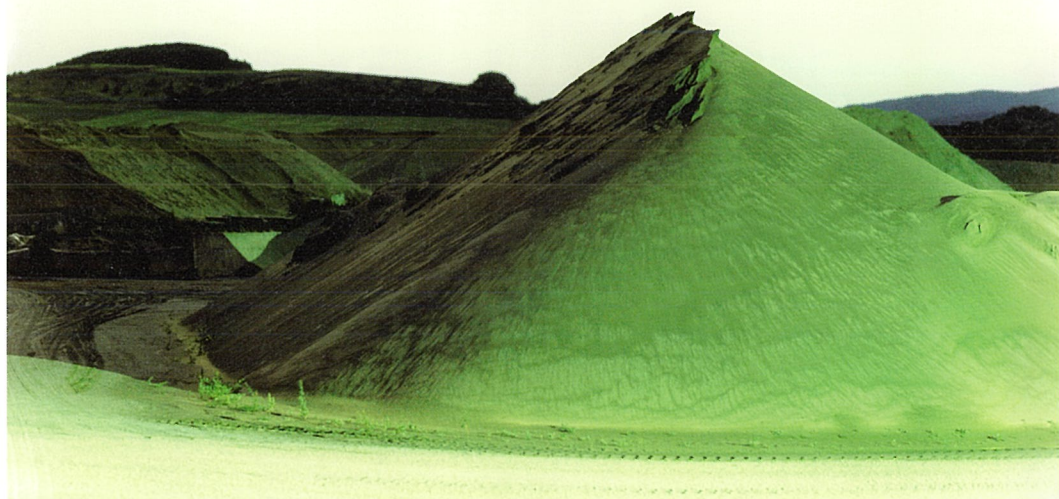


Landscapes upon which the Artists Gazed

眼差された風景

4人のアーティストに、特集「インタラクトする風景」のために、誌上に写真を掲載したいと話をした。とは言っても、あらたに撮影を頼んだわけではないし、新作だとしても、彼らと彼女は、いつものようにシャッターを切っていたことだろう。ただ、4人の眼差しに映ったものを、風景と呼ぶことは、これらの写真を見る私たちに留保されている権利であると理解したい。

ポール・ヴァレリーの風景画をめぐるエッセイは、近代の多くの表現者たちの頭の一隅にあり続け、その思考や制作を抑圧してきた。いわく「風景画の発展は芸術の知的な部分のとりわけ顕著な衰えとうまく一致しているように見える」。この言葉は、科学からの芸術の追放、知と視の分離の最後通牒のようにも捉えられる。他方で、馬をうたったドガの詩句からマイブリッジの写真にふれ、それが芸術家たちの誤りを明らかにしたという。写真は、「狩猟の言語」にも似て、曖昧さを退け、また形而上学からも距離を置いている。



砂山



高架下のまもり











